

舞踏天使

# プリマエイ

葉原鉄

表紙イラスト：秋月からす

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された  
『舞踏天使プリマーユイ』  
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



舞踏天使  
プリマ  
ユイ

葉原鉄  
表紙 / 秋月からす

# 登場人物紹介

## Characters

---

ふるま

### 古間ユイ

心優しい天然女子学生。普段は運動神経ゼロだが、天使アンジーの力で魔法少女・プリマーユイに変身し、魔空体と戦う。魔空体を退治する為に舞踏をしないとイケない。

### アンジー

まん丸いヌイグルミのような生き物。れっきとした天使で、魔空体を退治するため、ユイをプリマーユイとしてスカウトした。

まくうたい

### 魔空体

別時空から流れこんだ悪魔的な力の塊で、人間に取り憑いては邪悪な願望を成就させ、存在規模を広げていく。

試合開始から一分五十秒、豪速の白球がネットを越えた。

まさに疾風迅雷。床に衝突すると同時に体育館が鳴動した。

床板が揺れかえり、選手も観戦者も無言で硬直する。やがて審判の笛が鳴らされた。クラス対抗バレーボール大会の先制点は歓声とともに四組の得るものとなった。

飛びかう歓声のなか、二組の古間ユイは着弾点の真横で小さな顔を強張らせていた。

「す、すつごい……長内さん、すつごい。私、わりと本気で死んじやうかと思つたです」  
か細い脚を震わせ、ネットの向こうの長内香津美を見あげる。無言で立ちはだかる長身の少女と対照的に、ユイは危ういほどに短身かつ華奢であり、頼りなげなほど幼い顔立ちをしていた。

「危なかつたわねえ」

チームメイトである椎奈しいなが後ろからしたり顔で話しかけてくる。

「いまのは元オリンピック出場選手の父を再起不能に追いこんだと言われる必殺スパイク、その名も父殺し」

眼鏡を上げ下げする椎奈に、ユイは固唾を飲んだ。

「でも——私、負けないから」

人形のように小さな身体を精いっぱい強がりです。

「グズでノロマでチビな私をチームに加えてくれたみんなのためにも、絶対に負けられな

い！」

「なに大げさ言ってるの。ジャンケンでメンバー決めただけじゃないの」  
斜め後ろの麗子が呆れ半分で言う。

直後、彼女の手元で爆音が鳴った。

「麗子ちゃん！」

バレーボール部のエースが長内香津美のサーブに吹っ飛ばされる姿を、ユイは驚愕とともに見守ることしかできなかった。

「むう……アレは元インターハイ選手の母を再起不能に追いこんだと言われる必殺サーブ——母潰し」

「ひ、ひいい、やっぱり怖いよお」

「でも！ ボールはまだ生きてるわ！」

麗子はたくみな後転で体勢を立て直し、鼻血を噴きながら上空を指差した。

白球がゆっくりと宙を舞っている。麗子の生かしてくれたボールだ。

「これぞママさんバレー大会準優勝の祖母を寝たきりに追いやった必殺レシーブ、地獄極楽明王返しよ！」

「ありがとう、麗子ちゃん！ その遺志はこの古間ユイが継ぐわ！」

ユイは深く腰を落とし、迫りくるボールに狙いをつけた。この日のために将棋五段の祖

父と特訓してきた技がある。

「必殺！」

すべての力をみなより小さな靴の裏に集中し、白砲射撃のように跳びあがる。

——はずが。

「ひゃっ」

つまずいてネットにダイブした。

「審判、タッチネットよ！」

「ユイにいちいち反則取ってたらキリないよ」

「ええーい、トロい！」

となりの都斗子ととこが全身のバネを使って跳躍し、スパイクを放った。

しかし、バレーボールは敵方にレシーブをされて高く宙に浮く。

そこでユイが見たものは、絶妙のタイミングで跳びあがる長内香津美の姿であった。

ジリッ、とユイのうなじが逆立つ。

——まずい！

敵の視線が向けられているのは、となりの都斗子の豊満な胸である。彼女は着地したばかりでバランスが取れていない。

「あぶなっ」

全身のバネを叩きつけるようなスパイクの瞬間、ユイはとつさに横つ飛びで都斗子を突き飛ばそうとした。同時に都斗子は、みずから横向きに倒れる。

「あ」

チームメイトが一斉に声をあげる。

白い弾丸の射線にいるのは、飛びこんできたユイだけである。

少女の横腹で悪魔的な衝撃が炸裂した。

可憐な短軀がサッカーボールのように吹き飛ばされた。

戦慄で頭が停止する。チームメイトの顔がスローモーションで滑っていく。

ふわりと視界に舞い散るのは、光を帯びた天使の羽根。

『相も変わらず無謀なことだ』

頭のなかに声をともしなわなない不思議な声が響いてきた。

『アンジー？』

ユイもまた声をともしなわなない言葉で、姿も見せぬ相棒に問いかけた。

体育館の壁に直撃する瞬間、

——ぼにゅんっ。

と、柔らかなものに受けとめられる。

ユイは何者かとともに絡みあつてその場に倒れた。



「おおお、これぞ超必殺サタニック・スーパーノヴァ！ あの技で血統書つきのプードルが再起不能！ よその家の犬なのに！」

「椎奈、ちよつとお黙りなさいよ！」

「なんで鈍がアタシをかばうかなあ」

チームメイトがどやどやと騒がしく駆け寄ってくる。

ユイはしばし呆然としていたが、やがて意外なほど自分の身が軽いことに気づいた。直撃を受けたはずの脇腹ですら筋肉痛の欠片もない。

そこにはうつすら半透明に輝く羽根が、ふわりと浮かんで消失した。幻覚ではない。ユイにはその優しい温もりがたしかに感じられる。

『そっか……アンジー、ありがとね』

『私は私の理に従ったまでのこと』

素直でない相棒に胸中でもういちど「ありがとう」を言う。感謝の気持ちはさらなる力となつて、彼女を奮い立たせた。

「古間ユイ、平気です！ つづきやろ！」

ふと、自分を取りかこむチームメイトが固い表情をしていることに気づいた。みな視線はユイの背後に注がれている。

ユイと壁の間で、体育教師の和井田わいだが苦しげにうめいている。どうやら彼の肥満体がク

ツシヨンになつていたらしい。

その手がユイの体操服の下に潜りこんでいた。スポーツブラで充分に事足りる平坦な乳房と、年不相応な無毛の恥丘が、脂肪たつぷりの太い指に触れられている。

「え、ええと」

状況を理解するのに数秒。

呼吸が止まり、再開するのにまた数秒。

「お、おい、これは違ッ」

手を引き抜かれても、時すでに遅し。

少女の絶叫が体育館に響き渡った。

「で、なんで和井田の野郎が無罪放免なんだよ」

都斗子がうどんを啜りながら半眼で言う。

「だって、わざとじゃないもん。それに私、先生のおかげで怪我しなかったんだし」

ユイはバナナをかじつてにこやかに笑った。

彼女と豊かな胸を揺らす都斗子、長く艶やかな髪が自慢の麗子は、日課のごとく放課後の食堂を雑談場にして駄弁っていた。

バレーボールでの一件で和井田は教頭に呼び出され、なにかしらの処分を受けるところ

であつた。もしユイが和井田の無実を証言しなければ、謹慎か辞職ということもあつたかもしれない。

「甘すぎなのよ、このグラニュー糖！」

麗子がパフェを嚙下しながら声を張る。

「私に頼りなさいよ！ 父様に言いつければ、あんなセクハラ教師即刻クビよ！」

「いいか、ユイ。高柳たかやなぎの調査によるとだな、和井田にやいろいろと噂があるんだよ」

都斗子は和井田に関する卑猥な話を列挙した。

前の学校も生徒の体操服を盗んだから追い出されたとの噂から、指導と称しての接触行為、トイレ盗撮疑惑、男子生徒のエロ本を奪って体育教官室に保管している、女子生徒のブルマを煮こんで肉じゃがの出汁にしている、などなど。

「気づいてないかもしれないけど、アイツしよつちゆう獣のような目でユイをジロジロ見つめてたのよ」

「うーん……」

ユイは恥ずかしい話を聞いてしまったせいで、小さな顔いっぱい血色を広げていた。

「私なんか見ても面白くないと思うけど……長内さんみたいにスタイルよくないし、都斗子ちゃんみたいに胸ボンじゃないし、麗子ちゃんみたいに髪がキレイでもないし、椎奈ちゃんみたいに眼鏡かけてないし」

腺液を伸ばすように亀頭をこすりつけられた。さらには男たちの手で指を折りたたまれ、それらを強制的に握りしめることになる。

焼けた鉄板に触れたような熱が、若々しい肌を貫いて骨にまで染みわたった。一瞬、ユイの心がとろりと蕩ける。

（な、なに……いまの気分、なんだろう）

自分の心境がどうなったのかわからない。魔空体の影響というのは、こうまで人を意味不明の存在にしてしまうのだろうか。

（あつい……ほんとうに、あつい……）

意識しはじめると、顔に押しつけられているペニス熱まで身体の芯に染みってくる。肉がシチュー状に溶かされていくという、甘美な妄想がユイの心に浮かんだ。

男たちはおふおふと感悦の息を漏らし、少女を思いやりもせず彼女の手を前後に動かしはじめた。かなり強くユイの手を握りしめているため、ひとすりすることにカリ笠の部分でゴリゴリと反抗を受けている。

「あう、あつ、ダメですう……そんなきつくしたら、ケガしちゃいますよお……！」

「ああ、キミが怪力で握りしめるせいでチンポ千切れそうだ」

自分たちで上から握りしめているくせに——などという考えも浮上してこない。電車に揺られ、顔はたぎる男根に囲まれて、粘つくような臭気に脳が痺れ出している。

「ど、どうしたらいいんですか……?」

ユイの問いかけに、男たちは目配せをしあう。

「ツバつけてりゃ治ると思うけどな」

「そうそう、舐めてくれよ」

「お、おしっこする場所なのに、舐めるんですか……?」

「出る場所は先の穴だけだし、そこだって僕たちみんな綺麗に拭いてるから、ね?」

ずい、ずい、と赤熱した亀頭が迫ってくる。ユイは肉臭さに耐え、彼らも被害者だからと自分に言い聞かせた。舞踏天使の役目は弱者を救うことだ。

「じゃ、じゃあ……動かないでくださいね」

痛みを緩和すれば、すこしは目を覚ましてくれるかもしれない。そんな希望を抱いて、おずおずと舌を出した。

「お、おお……舌までちっちゃいぞ……」

男たちが手を離してくれたので、まずは握らされていたペニスを舌に向け、膨れあがった竿をちろりと舐めてみた。

うう、と男がうめく。たしかに痛そうだ。

「ガマンしてくださいね……私、がんばりますから、痛みにも魔空体にも負けないで……ちゅくっ」

唾液が牡肉に付着し、水音を立てる。すこししょっぱい。

いたわりの舌遣いで先端に降りていく。皮が折り重なった場所を通るとき、男がとりわけ大きくうめいた。患部はこのあたりらしい。

「ちゆる、んるお……ガマンできなかつたら、言つてくださいね」

「だ、だいじょうぶだから、もつと……ああ、魔空体が抜けていきそうな気が……」  
震える言葉に、ユイはペニスに囲まれた状態ではじめて表情を輝かせた。

「ほ、ほんとですか？ がんばります！」

舐めやすいよう顔を横に向け、患部が痛まないよう舌全体で唾液をたっぷりとなすりつけてみる。ペニスどころか腰そのものがビクンビクンと跳ねているが、その躍動こそが魔空体と戦う理性の律動のように思われた。

どるう……と、鈴口から透明な粘つきが大粒でこぼれてきた。

「もしかして、これが魔空体のエキス……！ これを搾り出したら……！」

「そ、そのとおりだよ！ しごき出して、僕を助けてくれ！」

——勝てる！

ユイは臭気の立ちこめる電車内で、ようやく勝利の糸口を見つけ出した。そしてまわりのペニスも、救いと希望を求めてユイに突き出されてくる。

「お、俺もお嬢ちゃんを見てたら勇気が湧いてきた！ 魔空体を追い出せそうだ！」

「お、俺も！俺のチンポからも魔空体をしゃぶり出して！」

「はい！プリマーユイ、誠心誠意お手伝いいたします！」  
小さな拳でいったんガッツポーズを取る。

（私、ひとりでもできる……！ アンジー、私はひとりでもみんなを助けられるよ！）  
勇気を胸に、チュチュ姿の少女は両脇の男根を優しく握った。彼らが悪に抗ってうめき声をあげるのを聞くと、

「がんばってください！私と一緒に正しい道を歩んでください！」  
天使の祝福を唇にこめて――。

チュツ。

チュツ。

と、キスをする。男たちが歓声をあげた。

「おくっ、んううおおッ」

「き、キクう……！」

唇についた粘糸を頬笑みで舐めとった。魔空体のエキスだとすれば、唇につけたままで他の男たちに感染してしまうかもしれない。その点、舞踏天使であれば、通常の間人間は魔空体に強い。ゴックンと細い喉を鳴らし、エキスを胃袋に落としこむ。使命感のためか、身体が熱く昂った。

「それではみなさん……患部をナメナメしますので、顔の前に、その……オチンチンを、持ってきてくださいね」

小さなお口をめいっぱい開き、舌を可能なかぎり外に出す。救うべき人間が多いのだから、多少下品な表情になるのもやむをえない。

熱気とともに殺到した亀頭が、舌はおろか唇や頬にまで押し当てられる。ユイはそれらの隙間でネリネリと舌を滑らせた。

ツルツルした曲面は強めにこすり、コリコリしたカリ笠は優しく撫で、痛ましく伸びきった裏筋には丹念に唾液をすりこむ。

たまに勢いよく顔を叩いてくるあわてん坊は、「めっ」と指でつついて押し返す。

「おちふいてくらしい、じゅんばんれすよ……んりゅッ、ちゅむうう……んっ、へろっ、えるう……」

「ご、ごめんね、お嬢ちゃん」

申し訳なさそうな声が可哀想に思えたので、慰めてやるつもりで鈴口に唇をつけた。ただキスをするのでなく、唇を窄めて魔空体を引きずり出すつもりで、

ヂュッ！

と吸いこんだ。

「んぐうッ！」



効果観面、男はうめきながら悪のエキスをトロトロとこぼした。ほかのペニスたちも舌で刺激されたためか、よりトロみを増した腺液を溢れさせている。

「んんうー、ひっぱいドロドロのが、れてきたでふね……」

幼い味覚器官の上で、何人分もの熱と透明汁が舌の上で渾然となり、味蕾に奉仕の歡びを感じさせていた。つぶらな瞳はうっとり細められている。

精いっぱいのがんばりのせいで、身体がすっかり茹だつて熱い。軽くひと休みをしたとき、ふと窓の外の風景が次の駅に近いと気づいた。人の少ないホームで踊ることができれば、きつと彼らを救うことができる。こんなにも前向きな人々なのだから当然だ。

「あとちよつとですから、みんな一緒にがんばりましょうね！」

「ああ、もうちよつと、もうちよつとだから！ ナメナメつづけてくれよ！」

電車が大きく揺れ、勢いでまたもペニスに殺到した。そのうちの一本が、予想外の勢いでユイの口内に飛びこんでくる。

「んっ！ むああッ！」

口腔を押し開け、奥まで侵入してくる異物感。喉を「コチュツ」と突かれた瞬間、呼吸が止まって胃袋が痙攣した。

（吐いちゃ……ダメ！ そんな無様なところ、がんばってるみんなに見せたくない！）

涙まじりに吐瀉感を押し戻す。それでも耐えきれず、小さく咳きこんだとき、

「ああ、お、俺も唾えてくれ！」

わずかな隙間にもう一本の亀頭をねじこまれた。

「んぶふッ、えおおおおッ」

双頭が押しあいへしあい、交互に幼口を前後する。ふたり分の熱が、脈動が、狭苦しい口内粘膜を激しく叩く。口元が歪み、唾液が垂れ流しになっても、ユイは彼らを拒絶せず、「吸って！」と言われればチュバチュバと肉頭を吸い、「顔振って！」と言われれば最後にピストン運動をした。

（歯、立てないようにしないと……！ オチンチン、きつと痛いから……粘膜で包んであげたら、きつと楽になれる……！）

喉を突かれる不快感も、男たちが苦痛と闘う顔を見ていれば払拭される。生臭い男根を味わっていると、彼らと一緒に戦っているという実感が湧いてくる。

「んひゅぶッ、んぢゅッ、ぶぢゅあぁッ」

細い首と狭い肩まで揺らして奉仕する少女に、ペニスの包囲網は無数の血管を浮かべて最後の律動に入っていた。溢れ出すカウパー腺液を童顔に塗りつけながら、少女の手で撫でられるたびにビクンと脈打たせる。

「もうダメだ、出る！」

だれかの悲鳴にみなが同調し、ペニスを膨張させた。口内の二本も顎を外さんばかりに

歯を押している。思わず唾液がこぼれるほどに、熱量も増していた。

「みな 노력と正義の心を受けとめられる——その幸福な感覚にユイは全身を震わせた。」「んふああッ！ らひて、くらひゃいひい！ わらひに、らひてええ」

歪んだ小さな唇と、ペニスを握った手ををキュツと締めつけた。

瞬間、男たちが腰を硬直させる。

ビクンッ！ ビクビクンッ！

ペニスに激しい放出の脈動が生じた。

「おおお、出る出る出る！」

びゅぐくッ！ どびゅぱあッ！ びゅぶるるッ、ぴゅばッ、びゅくびゅくびゅくッ！

どびゅどびゅどびゅぱああッ！

「んごおッ、ふばッ！ あむううううッ、んぱつ、ぱぶあああッ！」

熱液がユイの口内と顔面をめた打ちにする。魔空体のエキスと思われる物体は、ヘド口のように粘っこく、乳酸菌飲料のように白濁としていた。

びゅぐびゅぐッ、どばびゅッ！

「あぶああッ、んッ、んぐつ、んんうう」

柔肌が高速で打たれると、毛穴の奥までべたつきで満たされていく。喉奥を叩かれると、苦悶とともに法悦感が湧きあがる。

苦い。不味い。なんとひどい味だろう。おまけに喉に亀頭が当たったままで射撃を受けているため、とてつもなく苦しい。

しかし、ユイはそれでも表情を澁らせるどころか、嬉しげに蕩けさせていた。

（魔空体がこんなに臭くて、粘っているなんて……みんな、こんなに気持ち悪いものに苦しめられてたのね）

不味ければ不味いほど、苦しければ苦しいほど、勝利の歓びは大きい。ユイは感動の頬笑みでそれらを浴びていた。

あまりに液量が多いため、結い上げた金髪もすっかり粘着質な光沢を帯び、頭上で輝いていた光輪すらねっとり粘着液にまみれている。顔から垂れ落ちた雫は細い首筋や白いレオタードの染みとなる。

彼女自身の思惑はともあれ、あどけない少女が一分の隙もなく白濁に染まりゆく様は、インモラルな美術品として周囲の股間にいつそうの刺激を与えていた。

「はあ……すつげえ、この子すげえよ、こんな小さいのにぶっかけられて笑ってるよ」

チュポン、チュポン、と口の二本が抜かれると、ほかのペニスで口内が撃たれる。

「て、天使様、飲んでくれ。俺たちのケガレを清めてくれよ」

「あふああ……はい、飲みまひゅう……わらひが魔空体、捕まえまひゅう……」

口をアーンと大きく開け、上を向いた。みながその意をくみ、一滴もこぼさないよう狙

いをつけてくれる。なかには顔や髪に降りかかった液汁を亀頭ですくい、口内に集めてくれる者もいた。

もう魔空体を逃すことはない。口に溜まっていく粘濁感に、ユイは勝利を確信した。

(私のなかに閉じこめて、舞踏で浄化しちゃうんだから)

横目に窓を見て、人気のない過疎気味の町並を確認する。駅への到着は間もなくだ。

そして、男たちの逸物が噴出を止めるのと、顔を這いまわっていたモノが離れていくのを待ち、みな視線を顔いっぱいに浴びて、

——ゴキョツ、ゴクツ、んぐつ……んっ！

と、一滴残らず嘔下した。小さな喉は苦しげに蠢いていたが、浮かぶ笑顔は晴れ晴れとしたものだ。生温く堅苦しい喉越しも、使命たち成の苦みだと思えば心地よい。お腹にはたっぷりと充実感もある。

まわりから拍手があがった。人の役に立てたという証拠だろう。

「えへっ、えへへ……みんな、ありがとう」

感涙を拭いながら、立ちあがる。チュチュの襷に溜まっていた粘液がとろりとこぼれるが、気にも止めずにつま先立つ。

舞踏天使として与えられた身体能力を活かし、華麗に回転しながら一礼する。

「私、みんなの協力を無駄にはしません！」

「こいつ、もう軽くイキやがった！ そのエロ顔、もつと外の連中に見せてやれ！」  
和井田がパチンと指を鳴らすと、吊り革の縛めから両手首だけがするりと抜けた。腕の  
中程を囲んでいたはずの光輪は——いつの間にか、消滅していた。

「あ……！」

絶頂感に戸惑う暇すら与えられず、ユイは上下に股を開いたまま前のめりに倒れた。と  
つさにドアに手をつけて留まるが、後ろからはますます猛然と突かれ、正面からはガラス  
越しに視線を受けてしまう。

「ひああああッ、あひッ、あああッ！ み、見ないでえ……！ んんんんんううう！」  
子宮口をゴリゴリとこね回されると、腹全体が電流のような愉悅に震え返る。ユイはま  
たも小さな絶頂に達していた。

（お、おかしくなっちゃう……！ 頭も身体も、すごくいやらしくなっちゃうう！）  
ユイは舞踏天使という存在が根底から覆ろうとしているのを感じていた。犯されている  
膣が熱い。傷口ですらジリジリと沸き立ち、快感を生み出している。胃袋いっぱいには嚙下  
した精液までが、魔空体の力によって内側からユイの神経を悦楽で染めあげている。

扉に手をつけて、ただ後ろから掘りたてられた。この体勢なら結合部を見られることは  
ないが、レオタードの肩ストラップが左右とも二の腕まで降りており、ぺったんこの乳房  
が見えている。首筋から降りてきた粘液で汚れている様が、見られてしまう。ユイの意志

に關係なく突起しているピンクの乳首も、粘つくような視線に当てられていた。

「ああああッ、は、恥ずかしいんですう……！ 本当に、恥ずかしいから、ああああ、み、見な、見ッ、みあああああッ！」

胸が、熱い。見られていると、熱くてたまらない。顔も熱い。大口を開け、ヨダレを垂らして、トロリと目を細めているのを見られると、たまらなく火照ってくる。

その様に車内の男たちも歡喜し、ひとりで勃起物を激しくすっていた。先ほど彼らによつてぶっかけられた精液は、胃袋や膣内のものおなじ作用をもたらしている。また彼らに粘濁を浴びせかけられれば、もつと気持ちよくなるのではないか？

ユイは恐ろしくも甘美な想像に囚われ、大開きのタイツ脚を淫靡にうねらせた。

「天使サマ、調子はどうだ？ 見られながら何回ぐらいイッてるかわかるか？」

和井田は吊り上げられたままの右脚を抱きこんだまま、破瓜から間もない少女の肉を高速の前後動で貪っていた。彼が小停止するたび、幼い身体は軽度の法悦にビクビクと痙攣する。あどけない顔は逆らいがたい淫色に染まった。

「あうう……やッ、あはああ……んッ！ ゆ、許してえ……！ 頭も、身体もお……ビクビクなつちやうんですう……！」

信じられなかった。一回イクごとに細胞が淫らに変わっていく。

(す、すごい……！ 私のアソコが、すごいことになつて……！)

窄まりようがないほど小さかった肉穴も、自ら蠕動してペニスをしゃぶり、内肉にこびりついた精子を洗い流すほど愛液を分泌して、和井田の腰使いを誘発していた。

イボとカリで乱暴に膣肉を掘削されながら、なお蜜はとろみを増していく。最初に痛かった分だけ、ユイの身体はなにかを取り戻すように快感を求めていた。

「んうううッ！ ま、また、ビクビクしちゃううう！」

ツツと乳首が硬化し、身体の揺れとともにレオタードの裏地でこすれた。駆けめぐる悦楽電流で、小山のような絶頂がひとつ高い段に至ろうとしている。

（わ、私……このまま、先生の望むままに堕ちちゃう……！）

うつむき、床に大粒の唾液をこぼしていた童顔が、ふいに後ろから和井田の手でつかまれた。正面を向かされ、あらためてホームの人々と視線をあわせられる。

「見な。男どもはみんな物欲しげな目をしてやがる」

当初の驚きようはどこへ行ったのか、男たちは駅員ですら好色な顔をしていて少女の危機を救おうとする者はひとりもない。女性の姿は、どこかへ消えていた。

「あああッ、やッ、やああ……魔空体の影響があ……本当は、みんないい人で……！」

「これだけさんざんレイプされて、まだ言うか！ このメスガキ！」

怒号とともに、スリムな幼腰が広く厚い掌で握りしめられた。膣道が締めつけられ、摩擦と圧迫が膨れあがる。ユイの感度は狂的なまでに跳ねあがった。



「はぐうんッ！ ふ、太くなつたよお……んひあああッ！ あッ、あああッ！」

フルートのように繊細な喘ぎ声が牡臭い車両に満ちた。車外にまで流出していると思えば、ぬるぬるの脂汗が全身の皮膚から一斉に溢れ出した。

「あの視線が全部オマエを犯してるんだよ。男はな、清純派気取りの舞踏天使プリマroiをザーメン注ぐための便所としか見てないんだよ！」

和井田は怒り狂いながら、イボペニスをぐつと膨張させた。肉棒の表面に浮かんでいる筋という筋が、虫の身悶えのごとく蠢きたっているのが、過敏な膻粘膜で感じ取れる。

「あああッ！ あ、あ、また、太くう……！ アソコ広がるう……！ また、出すんですかあ……先生、精子を、私の、中にいい……んひいいいいいい！」

やめて、と拒絶しようにも、言葉すら自分の思うとおりにならない。

あのとときの、感覚——すべての突起と鈴口から噴出する、高圧力の体液——。

思い出せば、上と下の小口から誤魔化しようのない濃厚なヨダレが垂れ落ちた。

へへ、とだれかが笑う。和井田か、ほかの乗客か、それともホームの者たちか。

「おい、あの子、本気でよがってないか？」

その声は、間違いなく外から聞こえてきた。舞踏天使の無垢であつた身体が淫猥な恥辱の火にくべられる。すべて魔空体のせいだからと考えなければ、ユイは気が狂つてしまひそうだった。

「はくうんッ！　だ、だめええッ、だめらめええええッ！　見ないでええ、わたしを  
目で、犯さないでええ！」

嘆きと喘ぎの最中、最高潮まで加熱された淫口は、暴力的な擦過運動で襲という襲をか  
き回され、とうとう小刻みな痙攣に見舞われた。

「お、派手にイキそうだな。イケ、淫乱チビ！　人前で処女マ○コイツちまえ、！」  
和井田がここぞと腰を引く。膣肉がえぐれるような、すさまじい快感があつた。

「ああああーッ！　はふッ、あひいいいいッ！」

ユイがドアに爪を立てた瞬間に、  
グチュンッ！

と、力いっぱい子宮口が殴られた。

「ん！　えああああああああッ！」

「おおお！　出ッ、るううう！」

車内に響き渡る咆哮とともに、小さな膣内で男の肉塊が爆発した。

びゅびゅびゅくんッ！　どびゅぶぶッ！　ぴゅぶぶパッ！　びゅばびゅばあ  
ッ！　ビュッ！　ビュビュぶうううッ！

先ほどの数倍もの噴射力——膣感が何倍にも押し広げられ——カッと幼性器が天井知ら  
ずの快感を爆裂させた。



ぴゅバツ！

キチキチに詰まっていた淫口の縁から白濁が逆流した。床にまで糸を引き、脚にねっとり絡みつき、トウシューズにまで――。

地についていた左のつま先が、精液で滑った。その拍子にトウシューズが脱げる。吊り革が右足首を解放する。扉に当てられていた手も滑り、上半身が倒れた。ゴリゴリッと、小穴と異形根の結合がこじれる。それもまた快感の稲妻となつてユイの性感を撃った。

「んああええああ……ッ！ も、もうらめええええ……もたないれすうううう！」

四つん這いになつたユイの背に、和井田が覆いかぶさつた。

「くうう、マ〇コも身体も本當にちっちゃいなあ、オマエは」

中年教師は分厚い腹で白いチュチュレオタードにのしかかり、カエルのごとく無様に床へ押し潰した。ユイの身体はほとんど和井田の下に隠れてしまうほどに小さい。彼女自身はそれで苦しいと考えるより先に、床の冷たさとのしかかる肉の熱さに戸惑つた。

（おなか……冷えちやうかな……）

あさつてな心配も、膣内ピストンが再開するまでのことだ。和井田が射精しながら腰を叩きつけてきていた。

「おほう、やつぱりイキながらするとキクな」

「ひやめえええつ、はひやあああああッ！ イキながら、ひやああああ！ 狂ふうう、

くるっひやうううううううう！」

四こすりほど、ユイの下腹越しに床を突かんばかりの突きこみのち、またもビュクビュクと大粒の濁弾が撃ち放たれた。ユイは重量感で肺と腹を潰され、弱々しい喘ぎとともに再三のオルガスムスによりあげた。

「あああッ、あつ、あーッ……！ あーッ！ あーッ！ あはああー……ッ……！」

目の焦点があわず、平衡感覚すらなくなつて、ふわふわと浮かんでいるような気分になつた。舞踏天使に変身するときと、すこし似ているかもしれない。

球形の天使のことを思い出すと、喘ぎとともに涙が出てきた。

「おーおー、イキすぎで嬉し泣きか？」

和井田がユイの頬をつかみ、仰け反らせるようにして持ちあげる。柔軟な舞踏天使は苦もなく顔をあげ、ぼつてりした唇で小さな口を塞がれた。

「んーッ、んぷっ、んぢゅあーッ！」

糸を引く舌で口内をなぶられると、それだけで痺れるような心地よさが走る。生臭い唾液を流しこまれ、どうしようもなく飲みこんでしまうと、言いしれぬ熱さが口から食道までを支配する。

和井田は口を離すと、唇と唇の間に伸びた糸もそのままに、邪悪な笑みで破顔した。

「ごちそうさん、美味しい処女をありがとよ。堪能させてもらつたぞ」

この続きは製品版をご購入の上、  
お楽しみください。

編集・発行

**株式会社キルタイムコミュニケーション**

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

**<http://ktcom.jp/>**